大正期における野上弥生子文学への考察

－<愛情小説>への道程－

李延垠*
lovelyje@hanmail.net

Contents

Ⅰ. はじめに
Ⅱ. 本論
　1.「ある女の手紙」と「K男爵夫人の遺書」
　2.「或る男の旅」へ
　3. 愛情の理想主義の実現ー「茶料理」論
　4. 野上弥生子と中勘助
Ⅲ. 終わりに

Abstract

野上弥生子が大正期を通して追求してきた文学主題の一つに、男女の間の愛情問題とそれに対する倫理意識に関するものがある。女性の人生において最も賢明さが要請される結婚問題、結婚後も続く精神的な動揺という愛情の根本的な問題に焦点を当てた一連の作品が存在しており、「茶料理」(『中央公論　大正十四年九月一日)という短篇がまさにその問題意識から出発した作品である。「茶料理」以前から「ある女の手紙」(『新日本　大正三年九月)、「K男爵夫人の遺書」(『中央公論_大正四年四月)、「或る男の旅」(『中央公論_大正十年九月)などの作品においてそのような追求の試みがみられ、いずれの作品も基本的に過去の愛情と恋愛が物語り展開の前提となり、現在においてその過去の感情をどのように処理すべきかが主人公の葛藤を触発させる原因となる。弥生子は、男女の間に存在する愛という感情を、欲求に対する抑制という倫理的な観点から、いかにより高い感情へ昇華できるかを、いわゆる「愛情小説」において追求してきたのである。大正初期、結婚後も続く夫以外の男性への「精神的な姦淫」とそれに対する断罪という作品主題(「ある女の手紙」「K男爵夫人の遺書」)から始まり、家庭を持つ男女の接近の中で起きるエゴイズムと抑制の相克という人間心理の解剖を試みた後(「或る男の旅」)、理想的な形の再会と青春との決別、さらに過去の情熱から友情への昇華にいたらせる「茶料理」までの過程が、作品を重なるごとに、彼女の意図した主題が深化され明確化していく。その意味で「茶料理」は大正期に提出された弥生子の問題意識

＊ 立命館大学大学院博士課程後期課程３回生　人文学専攻日本文学専修

교보문고 KYOBO Book Centre

に対して一つの出口を示した作品として位置づけられると思われる。
本稿で取り上げる作品は発表当時注目を浴びた作品でもなく、世間にあまり知られていないため、弥生子文学のなかで「家庭物シリーズ」のなかでとらえられてきた。しかし、大正期の弥生子において個人的にも社会的にも重い文学主題であった愛情と倫理の問題は、社会問題へ眼を向き本格的な長篇小説を描き出した昭和期の文学活動への端緒を提供しており、その意味で大正期のこれらの作品に対する正しい評価と位置づけが必要である。本稿では「茶料理」以下の作品群を「愛情小説」と規定し、弥生子流の「愛情小説」の性格とその本質を明らかにしたい。

Key Words：野上弥生子、愛情小説、茶料理、ある女の手紙、K男爵夫人の遺書、或る男の旅

Ⅰ. はじめに

日本において近代的な自我に目覚めた女性たちの本格的な戦いが始まったのは、一九一〇年の雑誌「青鞜」(一九一一年九月～一九一六年六月)の創刊からである。「青鞜」は日本で初めて試みた女性による文芸雑誌だっただけでなく、日本の女性解放運動の原点になる雑誌である。明治期の啓蒙家である福沢諭吉は「学問のすすめ」の中で、新しい日本が創出しなければならぬ人間像として、女性も男性と同様の独立した人格であるべきだと説いたが、[1]明治時の女性教育は、独立した人格としての女性ではなく良妻賢母が主な目的であった。[2]日本の近代初

1)「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らずと云へり。されば天より人を生ずるには、万人は万人皆同じ位にして、生れながら貴賤上下の差別なく、万物の霊たる身と心との働を以て、天地の間にあるよろずの物を資り、以て衣食住の用を達し、自由自在、互に人の妨げをなさずして、各安楽にこの世を渡らしめ給うの趣意なり。(中略)人は生れながらにして貴賤貧富の別なし、唯学問を勤めて貴賤上下の区別なく皆悉くたしなむべき心得なれば、この心得ありて後に士農工商各その分を尽し銘々の家業を営み、身も独立し、家も独立し、天下国家も独立すべきなり。」(小室正紀・西川俊作編(2002) 福沢諭吉著作集第三巻 学問のすゝめ　慶応義塾大学出版会)

2) 近代日本において、女は「良妻賢母」たることが期待されたと言われている。「良妻賢母」とは、女子教育が理想とする女を表すために明治初期より用いられた語の一つで、明治三四(一九〇一)年に文部大臣に就任した菊池大麓によって定着した。仙波千枝は『良妻賢母の世界』(慶友社、2008)の中で、「「良妻賢母」という規範の影響力は女子教育を受けることがなかった女にも広く及んだため、「良妻賢母」は近代日本における理想の女を表す語」であったとし、「日本が近代社会を形成するうえで、女は「良妻賢母」という役割を課されることによりその一員として位

교보문고 KYOBO Book Centre

期は女性の自我実現が拒否され、男性のアイデンティティーを核とする富国強兵に順応する女性の役割である良妻賢母主義が強調された。

このような制度に異議を提起したのが先駆的な女性作家たちであった。女性解放の象徴と言われる、平塚らいてうの「原始女性は太陽であった」という創刊辞で有名だった「青鞜」が創刊されるとそれに刺激を受けた当時の女性作家たちの多くが「青鞜」に参加した。

「青鞜」は日本女子大学出身者を中心メンバーとして、比較的に上流階級出身の女性たちが主流になっていた。彼女たちのニックネームだった“新しい女”は決して賛辞の言葉ではなく、社会とマスコミの嘲笑と非難は彼女たちの活動に大きな障害物となり、政府の弾圧を受けることさえあった。近代化の中で文学的活動を通して女性解放運動を推進した女性作家たちは社会の偏見や非難の中で苦しい一生を送り、不幸な最期を迎えるのが常であった。

その中で、「青鞜」の活動に好意を持ち度々作品も発表した野上弥生子は、[3]宮本百合子や平林たい子、伊藤野枝などと同時代に活発な作品活動を行いながらも、彼女たちの波乱万丈な人生[4]とは違って、一歩離れた所で文壇と直接関わる

置づけられたのであり、「良妻賢母」は女を近代日本の一員たらしめる語」であったと指摘している。また「良妻賢母」という語は、女を抑圧するイデオロギーととらえられてきたものでもある。脇田晴子ほか編『日本女性史』(吉川弘文観、1987)で「女性に対してなされる中等教育の目標が『良妻賢母』養成ということに限定されたこと、したがって女性の生き方としては人の妻となり母となることがすべてであり、妻や母にならない生き方は一般に異端者として扱われた」と述べられているように、「良妻賢母」という規範は女の言動や生き方を制限すると考えられてきた。

3) 野上弥生子と『青鞜』の関係は、創刊当時、社員の一人として名をつらねたが翌月退社したと年譜にしるされ、そのように知られてきた。『青鞜』創刊号に、社員の一人として「野上八重子」の名が印刷されており、次号(十月号)の「編集室より」の欄に、「此度社員野上八重子氏にはよんどころない御事情の下に一時退社なさる事となりました。真箇に私共幾重にも残念には存じますが、何分余儀ない御事情故。尚御作は時々頂けるさうで御座います」とある。しかし、平塚らいてうの自伝『原始、女性は太陽であった』(大月書店、一九七一年)を見ると、彼女が『青鞜』の社員であったことは否定されている。平塚は「野上さんから直接お伺いしたところによると、そのころの野上さんは、木内さん(木内錠子、『青鞜』発起人の一人—引用者)と親しくしていられた関係で、『青鞜』の発刊については、好意をもっていたものの、最初から入社したことはないということでした(中略)社員としてお名前を挙げたのはこちらの思いちがいのようで、したがって“退社うんぬん”の記事も誰が書いたものか(多分木内さん以外にはあるまいと思いますが)見当違いの弁であったことが五十数年ぶりにわかったのも奇妙なことでした」と語っている。

4) 野上弥生子と親交があった伊藤野枝は、夫辻潤と離別後、家族と仕事を捨て、翌月からアナキズム運動の中心人物であった大杉栄と文通を開始。秋に同棲。大杉には内妻の堀保子のほか

교보문고 KYOBO Book Centre

ことなく、独自の路線を歩いた日本を代表する女性作家の一人である。5)

一八八五年生まれである弥生子は、その一〇〇年後の一九八五年息を引き取るまで、現役作家として数多くの作品を残している。弥生子の代表作といえば「真知子」(「改造」昭和三年八月～昭和五年十二月)、「迷路」(「岩波書店」昭和二三年～昭和三一年)、「秀吉と利休」(「中央公論社」昭和三九年二月八日)などの社会的な意識の強い長編の作品が挙げられるが、その多くが昭和期に集中しているため、彼女の文学経歴の中で大正期という時期があまり注目されていなかったのは事実である。津田孝は、「野上弥生子について」(「民主文学」一七八号、一九八〇年九月)の中で、弥生子の作家活動の時代的区分を、①初期作品から「青鞜」の時代へ、②「青鞜」の時代から「海神丸」まで、③「海神丸」から「真知子」「迷路」へ、④「迷路」から「秀吉と利休」へ、⑤「秀吉と利休」以後と、五つの時期に分けているが、それに従えば本論文で取り上げる諸作品は②の時期に該当する作品への考察である。

①に当たる時期は、夏目漱石の推奨によって「ホトトギス」に掲載された、デビュー作である「縁」のような写生文風の短編が主に発表された。③以降の時期は、プロレタリア文学運動の台頭の時期にあり、多くの知識人作家が「無産階級運動」に接近し参加してゆく時期であったため、弥生子もその運動への関心を強

に東京日日新聞の記者、神近市子という愛人もおり、苦し紛れの「自由恋愛論」は批判の対象となっていた。ここに野枝が参入して四角関係になり、神近が十一月に葉山の日陰茶屋という旅館の一室で大杉を刺し、瀕死の重傷を負わせるに至る、いわゆる「日陰茶屋事件」が起った。神近は大杉に経済的援助を与えていたため生活は困窮、この件もあり「青鞜」は廃刊した。弥生子のライバルでもあり、親友でもあった宮本百合子は十五歳年上の古代東洋語研究者荒木茂と結婚、しかし生活面での食い違いで一九二四年に離婚。野上弥生子を介して知り合ったロシア文学者湯浅芳子と共同生活を送りながら、破綻した不幸な結婚生活を長編「伸子」にまとめた。一九三一年、日本共産党に入党。翌年、文芸評論家で共産党員でもあった九歳年下の宮本顕治と結婚したが、まもなくプロレタリア文化運動に加えられた弾圧のために顕治は非合法活動に従事することとなり、夫婦での生活期間は短かった。一九三三年、顕治が検挙され、日本共産党査問リンチ事件の主犯であるとして裁判にかかることになった。百合子は翌年正式に顕治と入籍し、一九三六年には懲役二年、執行猶予四年の判決を受けた。その後も検挙や執筆禁止などを繰り返し経験し、体調を害する事もあったが、夫とかわした約九〇〇通の書簡はのちに二人の選択をへて、百合子の没後「十二年の手紙」として刊行された。

5) 野上弥生子が、「青鞜」との関係を語ったものとしては、「現代の作家」(中野好夫編、岩波新書、一九五五年, p.155.)で次のように語っている。「わたしは、「青鞜」に寄稿したり、平塚(雷鳥)さんとも一応知合いであったが、その関係は結局外郭的なものにすぎない。平塚さんとは同じ年だったが、いわゆる「青鞜」運動そのものの在り方にはわたしは客観的だった」

교보문고 KYOBO Book Centre

く示しつつも、客観的な態度をくずさないという「同伴者」的な立場からの作品が反響を呼んだ。一方ちょうど大正期に当たる②の時期は、彼女個人的に三〇代という壮年期を迎え、三人兄弟の母親にもなり、人間的な成熟が求められる時期であり、作品の傾向も初期の写生文風の短編と昭和期の本格的な長編の過渡期に位置する。その題材は、自分の子供の成長による微妙な心理や生態を描いたものと、弥生子の周辺の人物の話や出来事が主な対象であった。その中で特に弥生子が大正期を通して追求した主題の一つに男女間の愛情問題とそれに対する倫理意識に関するものがある。

大正時代といえば、恋愛論ブームが起り「恋愛」や「結婚」をめぐる論議が花開く時期でもある。従来、恋愛という言葉と観念が欧米から輸入された新しい観念であったとする通説によって、日本人の恋愛意識の変化を恋愛輸入以前と以後、すなわち明治時代に求めていた。しかし、明治に輸入されて恋愛の帰結が明瞭なかたちで現れてくるのは、もっとのちの大正時代であるという菅野聡美の指摘は見逃せない。[6]それは、新思想がすべて流行し定着するのではなく、普及や定着には時間もかかるためだということである。事実恋愛や男女間の愛情の問題が、小説の素材としてだけではなく考察の対象として取り上げられたのも、主として大正時代であると言われている。[7]

その背景には恋愛に対する意識の変化や結婚観の変化によって情死事件や恋

6) 菅野聡美(2001)　消費される恋愛論―大正知識人と性,　青弓社、pp.13-27.

7) 菅野聡美は、情死や恋愛スキャンダルが多発する大正時代は、恋愛論の隆盛期であり、そのさきがけとなったのが、厨川白村の「近代の恋愛観」(『東京朝日新聞』大正十年九月三十日～十月二十九日)であるとする。その後著名人の恋愛事件をめぐって新聞・雑誌には華々しい議論が展開され、雑誌の特集や論文のタイトルに「恋愛」がやたらに目につくようになり、「恋愛」を冠した単行本も続出する。菅野聡美は、恋愛が文学の素材としてではなく考察・分析の対象として認識され、実際にそれがなされたことに大正期の独自性、すなわち明治期との相違であると主張している。明治期においては、「男女交際や夫婦関係、結婚のあり方は議論され」「恋愛そのものはほどんど言及されなかった」が、それが大正になって、「大の男が真正面から論じるに値するテーマ」として扱われるようになったのである。菅野聡美はその背景として「知識人の関心が明治期の天下国家から、大正期に入って個人や自我といったパーソナルなものに向けられたという思潮の変化」と、「論壇に女性が登場したこと」、また「恋愛の性的側面も積極的な議論の対象」にし、肉体や性欲を否定したり避けたりはしていない大正期の風潮の変化を指摘している。肉体と精神の二分法に依拠して、精神的な「清い恋愛」だけを称揚したという明治期の「恋愛」観念輸入に関する一般的な指摘が、大正期の恋愛論にはあてはまらないということである。(菅野聡美、前掲書)

교보문고 KYOBO Book Centre

愛スキャンダルが多発していたことが指摘できる。8)明治時代と違って大正期の情死や恋愛事件となると、恋愛をしたことへの非難より、既成道徳に反していても、ある点では同情し、どうすればよかったかを考えるようになる。事件の背景への関心も高まり、事件は普遍的な問題提起へとつながるのである。続発する恋愛事件は一般の人々に恋愛に対する関心を呼び起こすと同時に、その恋愛を疎外する社会状況を普遍的な問題として考えさせる基盤を創出した。また恋愛や愛情の問題が男女を問わず一般大衆の関心を引き付けた背景として婦人の読書欲の増大によって女性を読者とする雑誌が増えたのも挙げられる。多くの人間が恋愛とは切り離された結婚をし、満足した結婚生活のできない現実の中で、新聞だねになるような恋愛事件が頻発していた。そのような雰囲気の中で弥生子自身が、明治三十九年、野上豊一郎との恋愛結婚を果たした当事者として恋愛と結婚、その中に潜んでいる男女間の愛情の問題は彼女にとって見逃せない大きなテーマの一つであっただろう。

本稿で取り上げる「茶料理」以下の一連の作品は、過去の愛情の問題が物語り展開の糸口となり、今現在の時点でその問題をどのように処理すべきかを問うという主題の共通性を持っている。今までは大正期におけるこの系列の作品群を家庭物シリーズ9)などという広い範疇の中で扱われてきた。特に、本研究で扱

8) 明治後半から大正期にかけての有名人ないし話題となった情死事件(煤煙事件(明治四一年)、菅野すが、荒畑寒村を棄て幸徳秋水と同棲(明治四二年)、北原白秋、姦通罪で起訴(明治四五年)、岩野泡鳴に同居請求訴訟(大正四年)、日陰茶屋事件(大正五年)、伯爵夫人芳川鎌子とおかかえ運転手情死(大正六年)、松井須磨子後追い自殺(大正八年)、野村隈畔情死、白蓮事件(大正十年)、有島武雄情死、武者小路実篤四画関係(大正十二年)。明治末年ごろには増えたといっても年に十件台だった新聞の情死報道が、大正六、七年から増加して二十件を超え、大正十三年には五十二件となっている。「日本離婚で世界一、五万八千件」(「読売新聞」大正五年十月二十九日付)、姦通事件の警察告訴が急増し、警視庁管下で月平均八百余件(「読売新聞」大正十二年八月四日付)というように、制度的結婚の破綻が顕在化しており、「この頃ふえた自殺者の七割は情事関係」(「読売新聞」大正十二年八月四日付)という現象が生じたのである。

9) 坂本育雄は「野上弥生子ノート」((1969)¯日本文学」十八(五))の中で「彼女の代表作は何なのか。「迷路」か「秀吉と利休」か。または戦前の「真知子」か「若い息子」か。それとも大正前期の「新しき命」以下の家庭物シリーズか」と弥生子の代表作の規定を試みるなかで、大正期の作品群を「家庭物シリーズ」と簡単に一括して分類を行っている。たしかに、明治から大正にわたって彼女が試みた作品の題材は、¯ホトトギス」を主要な舞台とし、賢明な家庭の主婦らしい品位のある写生文脈の作品群(「七夕さま」(明治四十年)、「柿羊羹」(明治四一年)、「鳩公の話」(明治四二年)など)や、子供たちの生態や心理を母親の愛情を持って見守りながら、子供たちの世界に、思想上の平

교보문고 KYOBO Book Centre

う作品に対する先行研究として、伊藤久美子の「野上弥生子の「茶料理」論」(2003、『昭和女子大学大学院日本文学紀要』十四号)と、渡辺ルリの「野上弥生子「或る男の旅」論」(1992、『人間文化研究科年報』八号)があるが、作品それぞれの人物設定や舞台設定などの作品分析と場所に対する実証的な研究が主になされている。渡辺ルリが大正期の弥生子に、「愛情問題を描く一連の作品がある」ことを指摘しているが、いまだその系列の作品への総合的な分析と位置づけはなされていない。大正期の弥生子文学を展望するうえで、この作品群への明確な分析が必要であり、愛情と階級問題を描いた昭和期の代表作「真知子」へのつながりを解明するためには、「ある女の手紙」から「茶料理」にいたるまでの愛情問題に対する、弥生子の認識の根底への考察が行われるべきである。ここでは人間の愛情への欲求が抑制という理性の働きによって、より高い感情へと昇華できるかを主題とした一連の作品群を<愛情小説>と規定し、諸作品の比較を通して弥生子の追求した愛情の倫理問題がどのような変化をみせて成熟していったかを明らかにしたい。

Ⅱ. 本 論

1.「ある女の手紙」と「K男爵夫人の遺書」

大正三年九月一日、『新日本』第一〇〇号に発表された「ある女の手紙」は、個人的にはちょうど一年前に次男が誕生し、発表された同月には彼女の実父小手

民主義として新しい市民的関係をつくりだし、そこから国や社会のあり方について疑いをうちだそうとした物語(「新しき命」(大正三年)、「二人の小さいヴァガボンド」(大正五年)、「母親の通信」(大正八年))、良家の思いやりのある主婦として、思春期の少女を女中として使い、その微妙な心理をいたわろうとした物(「小指」(大正四年)、「渦」(大正五年))などが中心であり、「家庭の団欒にあって読まれるにふさわしい読物」(瀬沼茂樹(1957)「家庭小説の展開」『文学』)という家庭小説の範疇に入るものとしてとらえられるかもしれない。しかし、それらは彼女の外部のもの、つまり<母>として、<主婦>としての目線で取材し描いたものであり、一人の<女性>としての内面を十数年間にわたって追求し続けた<愛情>の物語は、「家庭物」の中で取扱うには異質であり、またそこには弥生子の追求した愛情の倫理問題の特性と共通性が明確に表れているため、<愛情小説>という枠付けの中で論を進める必要があると思われる。

교보문고 KYOBO Book Centre

川角三郎が死去するなど夥しい日々が続く中で書かれた作品である。二十九歳となった彼女は「青鞜」を主な発表の場所とし、大正二年からの翻訳「ソニヤ・コヴァレフスカヤ」を連載しながら、「中央公論」や「東京朝日新聞」においてもいくつかの作品を発表するなど、作家的な活動を本格化していった。この作品に対する弥生子の言及や当時の執筆状況が分かる日記などの文章は見当たらず、世人にあまり知られていない作品の一つである。しかし、結婚にまつわる男女の愛情の問題に焦点をあてた大正期の作品の中で、「ある女の手紙」は弥生子自身の経験がもとになっており、その後の作品にも内容的な共通性が引き継がれて行く短編である。

「ある女」であるK男爵の若い未亡人は、夫の死後七年間、北の郊外に在る別荘で殆んど隠遁者のように暮らしている。ある七月のさわやかな朝、Kという男性から手紙を受け取り、それに対する返事を書く場面から始まり、その手紙の内容そのままが作品となっている。Kと夫人と津川は友人関係にあり、十年前にすでに結婚していた夫人との交際を断った津川が、今度は彼から夫人に会いたがっているという内容の手紙を、共通の友人であるKが寄越したのである。夫人はその返事において、津川に交際を断られて以来、十年間にわたる自分の感情の変化を細かく記述し、すでに昔のような情熱は冷めてしまったが、一度食事でも一緒にしたので来てほしいと言葉で締め括っている。

この作品は書簡という形式を用いて、女主人公である夫人の「秘密」を共有している第三者に彼女の過去と現在を告白するという形をとっている。現在の夫人は三十歳くらいで、二十三歳の時良人を亡くした未亡人として設定されている。しかし彼女は良人の「放縦な行状」によって愛情も関心もない夫婦関係を維持していたようである。そんな彼女が安息の場として求めたのが良人の親友であり、血族でもある津川への一方的ともいえる文通だったのである。良人に話しても解してくれない内容を津川に書き送ったことを、「神に祈祷をするような気持」と比喩させるほど、夫人にとって津川は神のような存在として、神格化されている。これは自分の「愛」の性質を「清浄」、「霊的」という言葉で表したことと通じる。夫人の恋愛は、誰よりも激しく、強く、深いながらもあくまでも「精神的なもの」として描かれる。彼女からの一方的な文通という設定も彼女の愛を「精神

교보문고 KYOBO Book Centre

的なもの」と化させるに役立っているのである。

また、作品の中で「卑怯」や「罪悪」、「胸の黒いわだかまい」などの言葉で表現される「罪意識」の内実は、良人以外の異性との特殊な関係からの咎めであるよりも、それを良人に秘め隠していたことへのものであることを指摘しなければならない。つまり、有夫の女が他の異性を愛していたことへの「罪」意識ではなく、それを良人に秘め隠していたこと自体に対するものである。ある意味で夫人のその言葉は「精神的な」恋愛だったということを理由に自分の行動に正当性を与えていると同時に、倫理的な問題を回避する便利な方法として使われているように感じられる。しかし、それを裏返してみると、異性との精神的な交遊自体より、それを良人に隠すことに対する「罪」意識の強調を通して、結婚後の異性との交流が許されない現実的な限界への指摘として読み取ることも可能である。結婚という社会的制度の中で束縛されなければならない女性の精神的な自由への渇望がはたして許されないものであるかという問題意識が窺える作品である。

そして、津川との文通が終わった後、その「罪」意識のため一生自分を責めて生きようとする彼女の「謙遜」と「自省」が、周囲には亡き良人への忠節や貞操として解釈される皮肉な人生を送る夫人の姿は、罪滅ぼしの生き方の形をしているが、実際は女のエゴイズムの発現に過ぎないという現実が暴きだされる。

そして、この作品においてもう一つ考えなければいけない問題点が、復縁を求める津川に対して、拒否の理由として夫人が挙げた「年齢」の問題である。次はその本文の引用である。

> 過去の詩はそのまゝ過去の詩にして胸の中に仕舞って置け。今様の散文に何故砕く必要があるのだ。その侭。その侭」斯う云ふ声が耳許に響きます。凡てが「年齢」のなせるわざに他ならないのです。(中略)恋を味ひ、且つ秘蔵する力はあっても、醗酵させ、沸騰させる勢ひはありません。(中略)別れたものは、別れた時の顔と心がいつまでもその人になるのが極まりです。私はあの人の上に十年と云ふ月日を付け加へて想像する事は六ヶ敷う御座います。あの人も多分同じ幻影を持ってゐる事と存じます。[10]

10) 野上弥生子(1980)「ある女の手紙」『野上弥生子全集』第二巻、岩波書店、p.146.

교보문고 KYOBO Book Centre

ここでヒロインは過去の情熱が既に過ぎ去っていることを打ち明け、特にその原因を「年齢」のためであることを強調している。さらに過去を幻影として育てていくことの危険性を指摘している。年齢という言葉がかぎ括弧で強調されているのは、作者の愛情問題に対する意識が年齢というものに託されていることを意味し、作品における主題が「年齢」の問題に帰結していくことを表すものである。歳をとるということは、過去の情熱から抜け出せる最善の解決策である反面、過去への幻影をさらに深くさせるという裏面性も併せ持つのである。したがって、津川からの復縁を拒否し、ただ食事くらい一緒にする程度の再会を求める彼女の言葉は、深まっていく過去への幻影を打ち切らせる方法として提示されたものであったと思われる。そして、このような試みは、弥生子の中に十年間培われ、「茶料理」においてより具体的な形で実現される。その意味で「ある女の手紙」はその後の作品への方向性が示されている作品と言っていいだろう。

「ある女の手紙」が発表された七ヶ月後の大正四年四月一日、弥生子は「中央公論」において「K男爵夫人の遺書」という作品を発表する。この作品はそのタイトルからも分かるように、肺病にかかり死を目前にしているK男爵夫人が「たった一人の友達」に送る書簡形式の遺書である。形式だけではなく、結婚して十五年が過ぎても、婚約中に出会った他の男性のことが忘れられず、一生持ち続けた自分の「罪」意識を第三者に告白するという、過去の出来事の回想と現在の心境を細かく綴る話の展開は、「ある女の手紙」と瓜二つの作品と言っていいほど類似性が多く見られる作品となっている。

この作品が「ある女の手紙」と異なる設定は、女主人公が婚約者がいるにも関わらず、偶然な機会に外国人の男性に「処女性の一部」である接吻を奪われてしまったことが発端となっていることである。前作の未亡人の積極性に比べて、この夫人は自分の意図からではなく、遊戯の一部として起きた予想もしなかった刹那の瞬間が彼女の一生に大きな打撃を与えてしまう。しかも相手が外国人と設定されているのは、そのショックを緩和させる効果をもたらす役割が期待されるにも関わらず、女主人公の受けた一見大げさに見えるかもしれない精神的な衝撃は、彼女の一生涯を支配させるほど大きなものとして描かれる。すなわち、このような夫人の姿は、いかに些細な一瞬間のことでも、それが人の人生にどれほど

교보문고 KYOBO Book Centre

多大な影響を与えられるのか、その怖ろしさを端的に表すための設定であると思われる。

両作品は人物と状況設定において違いを見せながらも、良人に対する「罪」意識という共通するキーワードを持つ。前述したように、前作の未亡人が「罪」を感じるのは「良人以外の或る異性と特殊な関係を結んだという心の咎め」ではなく「それを良人に秘め隠している事」であるとしている。「K男爵夫人の遺書」の夫人は「私の秘密が単にこれだけの挿話を良人に隠していたというに過ぎなかったのなら、今になってこれほど怖れたり、悲しんだりする事もなかったかも知れ」ないとし、「精神的な姦淫」が「一生涯続いて来た」事が「罪」であるという。

そして、夫人の真実の姿は、「貞節」な妻、「死の瞬間まで彼を愛した―彼一人のみを愛して来た二心のない優しい妻」であると信じている良人の期待に背くものであり、これは「ある女の手紙」の未亡人の皮肉な人生と重なる。また、二人の最後が死に近い「隠遁者」であったり、「死」を目前にしているという悲劇的な結末は、「精神的な姦淫」への断罪としての意味を持ち、不幸な運命を自分の行動の代償であると認識しそのまま受け入れようとする、ヒロインの運命を受容する態度の消極性は両作品に通低するものの一としてあげられる。

2.「或る男の旅」へ

大正初期の弥生子において重要なモチーフであった男女の愛情とその倫理意識の問題は、大正十年九月、「中央公論」において発表された「或る男の旅」によってもう一度追求される。

平野謙はこの短篇に対して、「世俗の道徳観に抗して、二人の男性を同時に愛するという愛情の形態は果たしてあり得ないか、許されぬものかと問い、その可能性を理念的に追及しようとしている」「たいへん倫理的な作品」であるとし、「観念的な作柄のもとに、愛の本質についての著者の理念的な追求がある」ことを高く評価している。[11]渡辺ルリは、平野謙の読みに一部分疑問を持ちながらも、人間の欲求の姿とそれを超えるべき智慧とその相克を描いている点で「倫理的」

11）平野謙(1965)「野上弥生子・宮本百合子」『日本現代文学全集』63、講談社、p.120.

교보문고 KYOBO Book Centre

で、男女の愛情の倫理に対する弥生子の問題意識が投影されているという面においては同意している。12)

「或る男の旅」が「リアリスティックに成熟すると「茶料理」のような、好短篇となる」という平野謙の指摘のように、この作品を主題的な側面において同じく「愛の本質」をテーマとしながら、作柄の面においての円熟さがみられる「茶料理」への方向性をしめしている作品として位置づけようとする評価の傾向が見受けられる。時期的に六、七年前に書かれた「ある女の手紙」、「K男爵夫人の遺書」と、四年後に書かれる「茶料理」の真ん中に位置するこの作品は、大正期の一連の愛情小説における作風の全体的な変化と弥生子の倫理意識の性格を明らかにする上で、重要な位置を占める作品であると考えられる。

現在、農商務省技師である新村真三は、役所の用事で青年期の初恋であった貞子の住む満州地方及び支那の一部を訪れるようになる。しかし偶然にもT市のM会社で、貞子の夫である植田に出会い、彼が滞在中視察の案内者として真三と同行することになる。植田との出会いが、十五年前の恋の記憶を蘇らせ、彼女にもう一度会いたいという欲求を倍加させる触発となる。過去真三が大学三年になった春、友人の妹であった貞子に恋をするが、競争者H―と真三二人から同時に告白された貞子は、二人を同時に愛することの罪深さのために、どちらの愛も受け入れることができないという貞子の返事によって、彼女への恋を断念したのである。十五年が過ぎた今、真三も貞子もそれぞれ結婚し、家庭を持っているが、植田の無能という評判を知った真三は、貞子の結婚生活が幸福でないと予覚して動揺する。貞子に会うことを決心できず、T市を去って天津へ向かう列車の中で、自己の「生涯の或る重大な線」に近付きながら越えなかったことを後悔し、縁ある人々として貞子との家族ぐるみの交際を空想する。欲求と抑制の心理の激しい駆け引きを経て、彼女に会うつもりでT市に戻ってきた真三は、植田の話から貞子と二人きりで会う機会を目前に感じるが、その直後貞子の急死を知らされる。次はその後の結末部分である。

---

12) 渡辺ルリ(1992)「野上弥生子「或る男の旅」論」『人間文化研究科年報』八号、p.118。貞子の死を「自害」と断定し、また作品が「二人の男性を同時に愛するという愛情の形態」の「可能性を追及」しようとしたものという解釈への疑問を提示している。

교보문고 KYOBO Book Centre

その日の午後、T―湾の大桟橋を離れた下関の汽船の一室には、この地上での今最も淋しい人として真三が乗ってゐた。彼は自分の失った二十代を再び持つことが出来ないと同時に、決して再び持つことの出来ない大事な道伴れの一人を見失った者であった。とは云へ彼の悲しみも、その時不意に彼の心を打った激しい恐怖に比べれば何でもなかった。―若し強ひて自分が逢はうとさえへしなければ、彼女は死にはしなかったのではなかったらうか―これがその恐怖であった。[13)]

この最後の場面において真三に与えられた「悲しみ」と「恐怖」という感情がどのような意味を持つのだろうか。まず「悲しみ」は、貞子の存在が地上から消えて初めて、彼女が若い日の苦痛を共にした「道伴れ」であるだけても掛け替えのない存在であったことを悟ったことからくる悲しみであるだろう。貞子の死によって、貞子の存在が欲望の対象ではなく、青春の共有者として人生の「大事な道伴れ」であったことを思いしらされるのである。

作品の最後に用意されている貞子の死は、列車の中で増大していった真三の再会への望みを打ち切る役割をする。そして、貞子に対する愛情の欲求が抑制できなかった真三のエゴイズムの断罪の意味を持ち、したがって「恐怖」は、自分の欲望による勝手な行動が貞子を死に至らせたかも知れないという罪悪感によって生じた感情であろう。「悲しみも、その時不意に彼の心を打った激しい恐怖に比べれば何でもなかった」という記述から、貞子を「高い感情」から道伴れとして認識しようとしたのは表面的な言い訳に過ぎず、心の底では密かに欲求の対象として意識していた真三の本音が暴かれるのである。真三の「恐怖」感は、列車の中で、貞子との再会を正当化させようと真実の感情と向き合うことを避け、自分自身を欺いていたことを証明するものである。それは、作者が、作品主題のウェートを真三のエゴイズムの断罪においていることの表しでもある。

では、貞子にとっての死はどのような意味を持つのか。作中で貞子の現在や近況が殆んど描かれておらず、真三の意識に寄り添う形で展開されるため、貞子の「急病」という唐突な死の設定に不自然さを感じずにはいられない。

貞子の主体的な意志や考えを知ることのできるのは、十五年前、真三に送っ

13）野上弥生子(1981)「或る男の旅」『野上弥生子全集』第四巻、岩波書店、p.147.

교보문고 KYOBO Book Centre

た手紙を通してのみである。その中で彼女は自分の「余りに引き付けられすぎ、心を奪はれすぎ」、「感じすぎ」る性格的弱点を自覚し、運命が、その弱点に罰を与えるために、真三とH―を同時に選べと命じたのだと嘆く。貞子がどちらも選べないというのは、消極的な行動のように見えるが、自分が結婚後の精神的な貞節に自身が持てぬことを予覚した上での決意である。ここで貞子の恋愛心理そのものよりは、精神的な貞節の問題を浮き彫りにさせ、欲求への抑制を働かせる心理の発現に作品の重点を置こうとする作者の意図が感じられる。二人を同時に愛すること自体に焦点をあて、愛情の倫理に対する疑問の告白へと導くのである。次は貞子の世間の夫婦像への疑問が語られるところである。

> 結婚する多くの女たちは(又男たちは)斯んな苦しみを何にも知らないですむのでせうか。私のやうな醜い悩みも持たず、怖ろしい不安にも脅かされることなしに、皆んな平和に愛を受け入れ、幸福に結婚し、安らかに夫の傍に、(男に就いて云へば妻の傍に)、眠ることが出来るのでせうか。(中略)人間は結婚前に一人で顔を赤くして来たやうな感情を、結婚後にも決して感じないと云ひきることが出来るものでせうか。その一つの事が、その人の心をも身体をも以前とはすつかり別な物に変化さして仕舞へるのでせうか。それとも感じても皆んな黙つてゐるのでせうか。[14]

このような貞子の結婚や夫婦のあり方に対す疑問は、人は結婚の時、迷わず相手を受け入れ、また結婚後もその迷いが生じないのかということであり、それは、弥生子が今まで持ち続けてきた愛情の倫理問題の中の一つでもある。結婚後も続く精神的動揺という問題は「ある女の手紙」と「K男爵夫人の遺書」から受け継がれた問題である。特にここでの貞子の台詞は、結婚に対する弥生子の問題意識が直接的な形で投影されている。感情的には二人の男性に惹かれながら、精神的な貞節を求める貞子の姿は、現実と理想のギャップを表し、理想の実現の不可能さを物語る。

二人の男性を同時に愛するために、どちらも選ぶことが出来なかった貞子にとって、十五年後、その一人と再会するかも知れない、再び彼女が懸念してした状況に立ち向かわなければならないという極度の不安に陥った可能性と、あえて

14) 野上弥生子、前掲書、p.230.

교보문고 KYOBO Book Centre

真三の「恐怖」を強調する作者の意図を考えるとき、彼女の死が自殺であるのも排除できない。また、その可能性は、前作の「ある女の手紙」の未亡人と「K男爵夫人の遺書」の夫人の生き方からも充分予想できるものである。

人間の愛情への欲求と抑制の衝突によって揺れ動く心理の葛藤をモチーフにしているこの作品はエゴイズムによって運命を逆らおうとする人間の欲望の危うさを描くと同時に、その運命をどのような形で受け入れるべきかを追究している。そして人間の行動の底に潜んでいるエゴイズムをどのように自覚し、いかにしてそのエゴイズムから解放されるかの主題は、四年後の「茶料理」へ受け継がれる。

3. 愛情の理想主義の実現ー「茶料理」論

この作品は、青春時代の一時期を共に過ごし、お互い恋愛の感情を抱き合った男女が、十五年ぶりに再会し、茶料理をともにして語り合い、別れていく様を男主人公の心理に寄り添った形で語っていく物語である。愛情の欲求と抑制の理想をあらわしつつ、にもかかわらず押さえつけることができなかったエゴイズムに対する断罪が描かれた「或る男の旅」の四年後の作品「茶料理」では、愛情の欲求へのエゴイズムを暴き出すのではなく、「或る男の旅」で示された「対者への情念を浄化する理想―地上で出会った掛け替えのない青春の共有者として情愛を抱く」[15]という主題を受け継げ、大正期において弥生子の文学主題であった愛情の倫理問題に対する一解答を導き出している。

結婚し妻と一人娘がいる三十八歳の依田は、著名な建築家となり、洋行を控えていたが、十五年前、互いに惹かれていたが、結局別れてしまった久子から突然の電話をもらい、約束の場所である東照宮下へ向かう。依田が二十三歳の時、小石川に住む官吏の未亡人宅に下宿しながら大学に通っていたが、父親の転勤で父方の伯母の家で女学校に通うようになった久子と一緒に暮らすことになる。依田に対して反抗的な久子の態度は彼への思いの裏返しであった。それを知った依田も彼女への気持ちを自覚するようになるが、相手の決まった女性を想うことに対する罪悪感から、苦悶の末、下宿先をでる決心を固める。故郷に帰

15) 渡辺ルリ、前掲書、p.180.

교보문고 KYOBO Book Centre

る前夜、久子の切迫した告白に動揺し、自分の思いを打ち明けたい気持ちに駆られるが、結局果たされず二人の関係は終わってしまう。久子は依田が去った後、親が定めた男性との結婚を退け、他の男と結婚した。そして今現在、三十四歳になり、二人の子供を持つ彼女が依田に再会を持ちかけたのであった。久子の案内によって茶室で茶料理を共にしながら、過去を語り合う中で、久子は友人つね子の恋愛譚を通して、自分にとっての依田の存在の意味を伝える。そして相手が依田であったからこそ自分は途を踏み外さず済んだといい、「あの時は有り難うございました」と感謝の言葉を伝える。そして二人は「親しみにまじる淡い寂しみと渋み」のうちに各々の内なる青春に静かに決別するのである。

伊藤久美子が「茶料理」の魅力について、「人物に対する周到な設定と舞台設定が、細部に渡って写実的な描きこみがなされている」「過不足のない設定」にあると指摘している[16]ように、十五年ぶりに再会が果たされる男女の姿が淡いながらも美しく描かれ、幸福な形で再会が行われるのは、作品主題を違和感なく実現させるための人物や状況の諸設定が適切に施されているためである。

青年依田は、誠実で自尊心の強い持ち主であるが、異性に対しては恐怖を感じるほどまだ異性への経験がなく消極的な行動をみせる。依田の視線から見られる久子は無愛想で生意気な感じを与えるほど依田に対して頑なな態度をとっているが、雑記長の落書きからも分かるように無邪気で自意識の強い女性として描かれる。この対照的な性格の二人は、その触れ合いの形にも影響を及ぼす。二人の相手に対する感情においても、心にもない男性との結婚をしなければならない久子の真剣さや切迫感に比べて、依田は久子のような切実な感情まで至らない。次のような依田の常識的な性格は二人の関係を精神的なものにさせるに一助する。

> 久子は半分きまつた女だ。それを知つてなほ積極的に感情を働かせることは、罪でないまでも、それに近い無節制な行為である。それともどんな罪を犯し、どんな無茶をしても久子を得なければならないほど自分は彼女を恋してゐるのだらうか。

16) 伊藤久美子(2003)「野上弥生子の「茶料理」論」「昭和女子大学大学院日本文学紀要」十四号、p.15.

교보문고 KYOBO Book Centre

その獲得に伴って生ずべき一切の険しい責任、他の運命に食ひ入つたものが、当然身に負ふべき刺を悔いなく受けうるだらうか。(中略)この際すべての迷妄から脱し、落ちついて眠り、朗らかな気持で秩序正しい勉強生活に返ることは、なにより必要であつた。[17]

このように依田は自分の中での自問と煩悶のすえに、久子への感情を「無節制」な行為と断定し自分の気持を急速に抑える。感情に傾かず、理性的な思考過程を通じて下された判断は、結局二人の再会が幸福な形で果たされる結果を呼ぶ前提となるのである。

また、十五年ぶりに久子から連絡を受けるまで、依田の中で久子は忘れていた存在であって、久子との出来事は青春時代の遠い夢のような追憶、その以上でもその以下でもなく、再会の直前にみられる依田の感懐は、二人の再会が男女関係を超越した成熟なものになることを暗示させる。依田は、久子も自分も青春期の情熱が既に過ぎ去ったことを安らかさと寂しさを持って予想し、十五年という歳月の重みを実感している。このような依田の心理と性格の設定は、その後の友人つね子の恋愛譚や久子の告白を、純粋に二心なく受け入れられる前提となるのである。

そして「或る男の旅」では、貞子の不幸な結婚生活の話から触発された、彼女に対する愛情の欲求を、人生の道伴れとして昇華させることができなかった真三と比べて、依田と久子二人とも幸福で安定した家庭を営んでいることが、陰影の感じない再会の前提の一つとなっている。「恨みも動揺もなく、すでに過去になった娘時代の一つの熱情に対して、朗らかに、興がるやうな微笑」を浮かべるようになった二人の十五年ぶりの再会は、このような対照される周到な設定によって、主人公たちの人生が不幸な形で結ばれていた前作とは大きな違いをみせている。

一方「茶料理」の物語の中には、依田と久子の過去と現在の物語以外にも、茶室で久子によって語られる友人つね子の恋愛譚が位置する。つね子は、女学校を卒業した春、妻子ある画家に恋をし、苦悩と陶酔の一ヵ月間を過ごした後、

17) 野上弥生子、前掲書、p.313.

교보문고 KYOBO Book Centre

二人だけで郊外に出る。しかし最後の瞬間、相手の妻のことを考え逃げ出してしまう。性格上の潔癖からすべての縁談を断り、死の瞬間でももう一度逢いたいという望みだけで生きていたが、彼は異国の地に渡り、そこで帰らぬ人となってしまう。つね子の話は久子の今回の行動を触発させる直接的な原因として作用する。つね子は皮肉な運命のいたずらによって、過去から引きずっていた複雑な感情を清算する機会を永久に逸し、生きる目標を突然奪われてしまった。だから親友には自らの意志で決着をつけるように、と助言したのであった。

> 「あなたにはほんの気まぐれにすぎなかつたことが、わたしの一生を支配しました」以上の言葉をわざと無技巧に、女生徒の暗誦見たいにつづけた久子を、依田は愕然とした。しかしすぐ落ちつきを取りかへした、厳粛な表情で見詰め、自制の調子で、口を開いた「久子さん、ついでにあなたの一言を聞かせて頂きませうか。」(中略)「……もっと短い、それこそ一と言で尽きることなの。—あの時は有り難うございました。」[18]

つまり、久子がつね子の挿話を通して、深い恋愛関係に陥ったわけでもなく、たった一瞬間の触れ合いにすぎなかったとしても、相手にとっては一生涯を左右させる影響力を及ぼすということと、自分の人生に大きな影響を与えているにも関わらず人生を一緒にすることの出来ない人にその宿縁の深さと感謝の言葉を伝えようとしたのである。

そして、久子の打ち明け話を抵抗なく受け入れられる依田の性格と諸設定によって、依田と久子の語り合いは、「彼等の年配に似合ったおちつきと平静」で、「そういう間柄の男女だけで笑へる笑ひ方で笑え」るのである。二人が味わっている「茶料理」の味を象徴する「親しみにまじる渋い寂しみと渋み」とは、二人以外には知られない青春期の追憶を共有していつことからくる親しみであり、過去の若さ故の熱情に対する懐かしさ、その「淡い」青春期に決別をつけなければならない寂しさであるだろう。

先に述べたように、前作における作者の「年齢」へのこだわりは、「或る男の旅」

18) 野上弥生子(1981)「茶料理」『野上弥生子全集』第五巻、岩波書店、p.329.

교보문고 KYOBO Book Centre

と「茶料理」にも受け継がれる。両作品において、恋の感情が芽生え始めたのは真三と依田が同じく大学三年の春である。貞子の年齢は作品の中で明らかになっていないが、高等女学校を卒業したということから久子の十九歳とほぼ同じ年代と推測される。そして、それぞれ三十四歳、三十八歳の男女二人の再会が同じく十五年後に設定されていることは、作者の意識下で施された重要な要素として読み取るべきであろう。次の本文の引用は、作家が意識的に過去の愛情問題を年齢の問題へと収斂させていこうとする努力が克明に見られる場面である。

> 自分がもう少し若かつたならば、この後の数日をこの侭では到底過ごせないだらうと思つた。けれども彼は年齢を頼んでゐた。四十に近い男が人生から学んだ経験は、そんな種類の惑乱に巻き込まれるには堅すぎる鎧を与えられてゐると信じてゐた。(中略)彼が頼もうとして頼み得なかつた年齢は、此処でも役に立たなかつた。前のことを決心するには彼はまだ若過ぎた。後のことを決心するには年を取り過ぎた。[19]
>
> 五六年まへの彼が、こんなおちついた気持ちでここに立つてゐられたのであろうか。その安らかさは一種の寂しさでないこともなかつた。(中略)おれももう三十八だ。久子だつてそれより四つしか若くない。[20]

弥生子の一連の愛情小説に見られる「年齢」へのこだわりは、過去の愛情問題を解消し新しい関係へ昇華させるための不可欠な要素として作用している。「若い心」は蝕まれ「冷やかな眼が開いてゐ」る今の状態は「凡てが「年齢」のなせるわざに他ならない」と津川との交際も拒否し世俗との縁を切った「ある女の手紙」の未亡人の姿は、「さまざまな想像が嫉妬にも圧迫にもならず」「遠い夢の追憶に似た懐かしさに変わつてゐる」と過去の情熱を落ちついた目で見つめるようになった「茶料理」の依田の高い感情への発展を見せる。これは「茶料理」に来て依田と久子の再会が肯定的な形で行われ過去の愛情による「惑乱」と「苦痛」を友情へ昇華させる上で必ず必要な設定であった。主人公たちが過去のわだかまりから自由になり、もう一歩精神的な成長を導き出す条件として「年」というものが有効な役

19) 野上弥生子「或る男の旅」、前掲書、p.230.
20) 野上弥生子「茶料理」、前掲書、p.320.

교보문고 KYOBO Book Centre

割をするのである。

人間にとって年齢というもの、年をとることは、過去の情熱から抜け出せる最善の解決策である一方、過去を追憶として包装しさらに幻影化させるという裏面性も持っている。一連の作品を通して追求してきた弥生子の問題意識は「茶料理」にきて、年配に合う笑い方で笑える久子と依田の再会による過去への決着を通し、年相応の人間的な進歩の可能性を導き出そうとしたといえる。

4. 野上弥生子と中勘助

渡辺ルリが「ある女の手紙」から「茶料理」に至る、愛情問題を描く一連の作品にみる「家庭をもつ男女の精神的な動揺と倫理の模索は、明治四十年代の中勘助との交際以来弥生子にとって重い文学主題であった」[21]と指摘しているように、弥生子が残した膨大な日記の中には、中勘助や夫豊一郎に関する記述が多くあり、そこにはまるで「茶料理」の女主人公のような生き方を思わせる弥生子の姿がある。彼女が残した膨大な日記の中には、夫に対する不満や苦悶などが赤裸々と記され、彼女の隠されていた素顔をみることが出来る。特に夫との夫婦喧嘩の主な種となったのが、夫豊一郎の嫉妬深い性格であったようで、その中心にあったのが中勘助[22]であった。

> 私のたえ難い苦悩はその不可能を悲しむのだ。その間にいやな、たまらない不純な嫉妬や束縛や圧迫が交って来るから腹が立つのである。要するに斯んなことでぐづぐづ云ひ合つたり、泣いたり苦しんだりするのは愚劣である。(中略)彼はすべての束縛を愛情の名に依つて解釈しようとする。しかし本統の愛情は相手を苦しめることではない筈である。相手のために忍ぶのこそ本統(ママ)に優しい愛情である。[23]

弥生子は自分に対する夫の過度な干渉と束縛に耐え切れず、日記の中で彼へ

---

21) 渡辺ルリ「野上弥生子「或る男の旅」論」、前掲書、p.118.

22) 哲学者・教育家。弥生子と同い年の一八八五年生まれで、豊一郎と同じく明治三十五年九月、第一高等学校第一部に入学し、三十八年九月には東京帝国大学文科文学部(英文学専攻)に入学。豊一郎、安倍能成とともに漱石門下である。

23) 野上弥生子(1986)『野上弥生子全集』第Ⅱ期 第二巻、岩波書店、一九八六年十二月八日、p.4.

교보문고 KYOBO Book Centre

の怒りを爆発させている。夫は弥生子と中勘助との関係を喜ばしく思わず、中勘助に関する問題については常にとげとげしく反応していたことがわかる。このような夫の過敏反応は弥生子の神経を刺激し、夫婦間の信頼関係や愛情問題などを考えさせられる要因として作用しただろう。

豊一郎の生前には、夫を意識してか、勘助に対する感情の記述があまり見当たらないが、一九五〇年二月二十三日、豊一郎が亡くなったあと、その葬式をきっかけに弥生子と勘助の交流が復活し、日記の中でも勘助との過去を回想する文章が目立つようになる。同年の三月十四日、勘助が野上家を弔問に訪れた日の日記に弥生子の気持が詳細に書かれている。

> 中さんにもう一度逢ふ瞬間は、三十年代四十年代五十年代を通じて私にはいろいろなかたちで考へられたものであるが、それがこんな自然さで果たされようとはお思はなかつた。(中略)とにかく彼の死はある意味で彼が長年私に与へなかつた解放であるが、(中略)これでは昔の私たちの二人のひめごとなどしめやかに語ることは出来ないわけだとおもふと、なにか微笑ましく、運命の皮肉を深く感じた。さうだ運命は私の密かな祈念を納れて私たちをめぐり逢してくれた。(中略)父さん、だからあなたも安心して私の交際を復活させて下さるでせう。(中略)これもすべて野上が死によつて私に示した愛であり、何十年と私を苦しめた、誰も知らない彼の罪の宥るしのすがたであらう。[24]

この文章で弥生子は勘助に再会した感激と喜びを躊躇せず表している。そして弥生子が勘助に一度逢うことをどれほど念じ続けてきたかと、昔二人の間に「ひめごと」とすべき出来事があって以来、何十年ぶりに二人の再会が果たされたことがわかる。また夫の死を一種の解放としているのは、「ある女の手紙」の未亡人が、夫が死んだ時に「わたしもこれで安心した、重い荷が下りた」という貴婦人の言葉を引用しながら、「冷たく、無関心な」眼を投げたときの気持を思わせる。

次は、再会が果たされた一年後の一九五一年九月、中勘助夫妻が北軽井沢で暮らしていた弥生子の山荘を訪れた時の日記である。

---

24) 野上弥生子(1988) 『野上弥生子全集』第Ⅱ期 第十巻、岩波書店、p.321.

교보문고 KYOBO Book Centre

> この山荘の客として招く日が来たことは、小説以上のロマンスといふべきである。(中略)四十年の歳月は思想的には彼と私のあひだには大きな距離をこさせてゐるかも知れない。しかしそれは私たちふたりが若い時代にもつたあの過去にとつては、なんらの故障もなりはしない。ことに私の一生の行動と感情は、その一つの秘密を摘出しないでは誰にもわからないほど、それは私を左右したものであるから。しかしプラトニックであつたことが、この愛をこれだけに成長させ、感化させ、昇華させたのであることも忘れまい。[25]

この日記の文章から四十年前、二十代であった弥生子と勘助の間に「プラトニック」な恋愛関係があったことが確認される。そして、その時の出来事が弥生子にとって彼女の「一生の行動と情感」を決定付けるほど、大きな意味を持っていたことが窺える。過去の一時的な感情が人の一生涯を左右したという弥生子の告白は「ある女の手紙」の未亡人と「K男爵夫人の遺書」の夫人、「茶料理」の久子の言葉そのものである。

次は、弥生子が二人の関係を知っていた唯一の人物である、安倍能成(論者注：豊一郎、勘助三人とも漱石門下の友人関係である)に宛てた手紙の一部分である。

> 中さんに対する私の感情のさまざまな推移は、書けばそのまま長編になります。しかし根本的に申せば、私はあの人のことほんとうはなんにも知らず、一つの幻影を彼といふ人に拵へてゐただけです。同時に私はあの人に対する深い感謝とともに、激しい謝罪のこころを持ってゐました。(中略)私のやうな多感な動揺しやすい女が、自分の生活にあくまで清教徒的になり、夫婦生活においても、とにかくお点の辛いあなたか落第点を貰はない暮らしをつづけられたのは、若い日のあの些やかな出来事が一種の種痘になったのです。[26]

「清教徒的に」に生きてきたという弥生子の言葉は「ある女の手紙」の未亡人が「謙遜」と「自省」のために選んだ「隠遁者」のような生き方と通じる。弥生子の二十代に起きたその事件は彼女の人生に大きな打撃を与えていたため、弥生子はそ

25) 野上弥生子(1988)『野上弥生子全集』第Ⅱ期第十一巻、岩波書店、p.121.
26) 野上弥生子(1991)『野上弥生子全集』第Ⅱ期 第二十五巻、岩波書店、p.265.

교보문고 KYOBO Book Centre

の大事な経験を作品化させずにはいられなかっただろう。これらの作品の中で追求されて愛情問題においての精神的な成長が、弥生子自身が一生を通して望んだ理想的な姿であることが、「茶料理」が書かれて二十五年後に果たされた中勘助との再会において証明される。次は勘助に対する感情の成長について述べる所である。

> とにかく彼は若い私の苦悩の原動力となつてゐた存在であることは事実だ。今それを客観視されることは私の成長と進歩である。実際、私は彼は彼としてでなく、一人の女の夫として迎へながら、実になんらの妬ましさも感ぜず、淡々としたおもひでその重大な変化に対することが出来てゐるのはよいことで、たのしいことだ。同時にまたそれほど心が老いた為でもあるから淋しいといへば淋しいわけだが、その淋しささへ感じない。逢はないでいろいろと過去の夢でロマンティックにされるより、かうして逢ひ、その「過去」へはつきりピリウドをつけたのはよいことであつた。[27]

弥生子は若い時期、勘助との出来事が苦悩を与えたことを認めながら、それを客観的に見詰めるようになった人間的「成長と進歩」に肯定的な視線を送っている。淡々と過去と向き合う事ができた彼女は、過去の夢に浸っているより、彼との再会を通して、過去に終止符を打つことが大事であるとする。弥生子のこのような志向はすでに「ある女の手紙」と「茶料理」の未亡人と久子を通して目指されていたものである。一生涯心残りになっていた過去の出来事、「幻影」として育てられていた青春の記憶を、相手の人と直接会い、語り合うことで青春への別れをつげようとした久子の姿は、弥生子自身が理想として夢見ていたそのものであったのである。そして勘助との再会は何十年前から培われていた弥生子の意志が果たされる格好の場を提供した。「茶料理」のなかで描かれていた、自分の理想としていた再会の形が現実のなかで実現されるのである。つまり「茶料理」のなかで構築された久子と依田の幸福な形の再会は、現在の自分をいさせてくれた、青春を共にした人に対する感謝の気持ちを伝えるとともに、整理できず残されていた青春に対する決着をつけるために設けられた場である。それは、弥生子自身の一生

27）野上弥生子(1988)『野上弥生子全集』第Ⅱ期 第十一巻、岩波書店、p.122.

교보문고 KYOBO Book Centre

涯を通じて追求してきた、愛情問題においてのエゴイズムを、どのように処理すべきかに対する一つの解答をみせたものとして大きな意味を持つのである。

Ⅲ. 終わりに

大正期を通じて家庭を持つ男女の接近を描き続けた弥生子は、「茶料理」において、彼女が理想とする愛情の形を導き出したと思われる。中勘助との交際が一つの原因となり、愛情の倫理問題を追求したとされる一連の作品の中で、ヒロインたちの人生は過去から自由にならず、過去の出来事が彼女たちの足を引っ張っている。不幸な運命を自分の行動の代償であると認識し、そのまま受け入れようとする消極的な女性像が描かれる。「精神的な姦淫」という愛情と現実の間で苦しむ女性たちを描くことで、愛情の倫理意識への問題を提起した弥生子は、「或る男の旅」においては、男性側からの視点に移り、過去の愛情の対象を人生の「道伴れ」として「高い感情」から接近しようとする方向性を示しながら、欲求と抑制の間を揺れ動く人間のエゴイズムを暴き出した。そして、「茶料理」にきて、過去の情熱を「あの時は有り難うございました」という言葉で昇華させる成熟をみせる一方で、「或る男の旅」で導き出されたが実現されなかった、青春の共有者、人生の道伴れとしての二人の再会は幸福な形で結ばれるのである。これらの作品の中で追求された愛情問題においての精神的な成長が、弥生子自身が一生を通して望んだ理想的な姿であることが、「茶料理」の二十五年後に果たされた勘助との再会によって証明される。その意味で、「茶料理」は大正期に提出された弥生子の問題意識に一つの出口を示した作品として位置づけられるだろう。

熱い火玉のような他人への愛情を胸の底に隠しながら、精神的に貞節でありたいという理想との狭間に苦しんだはずの弥生子は、強靭な精神力と自己コントロールを通して、誘惑を乗り越え四十年が過ぎた後、彼との再会の時には過去を「若いころの一つのノスタルジヤ」として向き合い、「淡い」気持で淡々と彼を人生の共有者として迎えることができたのである。弥生子にとって「茶料理」は大

교보문고 KYOBO Book Centre

正期、彼女の二、三十代の青春期を清算する意味を持つとともに、人間としての成熟への願望が盛り込まれている作品として意味を持つだろう。

参考文献

稲垣信子(2003)「野上弥生子日記を読む」(下) 明治書院、p.180.
伊藤久美子(2003)「野上弥生子の「茶料理」論」「昭和女子大学大学院日本文学紀要」 十四号、p.15.
菅野聡美(2001)「消費される恋愛論—大正知識人と性」 青弓社、pp.13-27.
逆井尚子(1992)「野上弥生子」 未来社、p.93.
瀬沼茂樹(1984)「野上弥生子の世界」 岩波書店、pp.21-30.
野上弥生子(1991)「野上弥生子全集」 第Ⅱ期 第二十五巻、岩波書店、p.265.
_____(1988)「野上弥生子全集」 第Ⅱ期 第十一巻、岩波書店、p.121.
_____(1988)「野上弥生子全集」 第Ⅱ期 第十一巻、岩波書店、p.122.
_____(1988)「野上弥生子全集」 第Ⅱ期 第十巻、岩波書店、p.321.
_____(1986)「野上弥生子全集」 第Ⅱ期 第二巻、岩波書店、p.4.
_____(1981)「茶料理」「野上弥生子全集」 第五巻、岩波書店、p.329.
_____(1980)「ある女の手紙」「野上弥生子全集」 第二巻、岩波書店、p.146.
_____(1980)「K男爵夫人の遺書」「野上弥生子全集」 第二巻、岩波書店、pp.299-318.
_____(1955)「現代の作家」 岩波新書、p.155.
平野謙(1965)「野上弥生子・宮本百合子」「日本現代文学全集」 63、講談社、p.120.
渡辺澄子(1984)「野上弥生子の文学」 桜楓社、pp.14-21.
渡辺ルリ(1992)「野上弥生子「或る男の旅」論」「人間文化研究科年報」 八号、p.118.

❖ 투고일 : 2010. 6. 30.
❖ 심사일 : 2010. 7. 14.
❖ 심사완료일 : 2010. 8. 2.

교보문고 KYOBO Book Centre